へ 13
3787
2

門へ13
3787
巻2

公亭仙果編述
一陽斎豊国画

三絶妖婦傳 二編

榮久堂發板

狐假女妖害猶淺一朝一夕迷人眼女為狐媚害所深日長月長人心

庭雪
松軒書

水無則何をもてか口を潤さん
めん水有ては命を絶ぶべし飲食の
ごとく必用の物なくんば叶ぬ事なり咸陽宮も美人の一炬み烏
有となり一顆投水と言ふ仏法なれば害も忘れ女色の世
界なくば人種は盡果て是水と火の如くなれば信ぬ世界
は賢愚婦人いまだ人非人色を色として賢を賢とせん女子
花の如くに傾老を嫌ふ高田の馬場も雲より
なつかしき人なれば物も使用の惡き知ハ
其害も水火の如く狐の人を化せんよりは
まして楊貴妃の中肉美味なる牡丹餅を捫うゝ宛轉
と玄宗の隨ものゝ教訓ありとて女を若い
水なりひとしき緊要なるべし脫毒物はまぶきに向水
の行狀を書て妃の用心とゝのふべし

寛永六年三月吉日

笠亭仙果

源太義平怨鬼
難波次郎經房
平相國殿北方
二位殿

平相國殿侍妾
松虫
同
鈴虫

兵衛佐源頼朝
周文王と模し
妹尾師涓
高雄文覚上人
雲中子に擬ふ

紫陽花譚　第貳編　標目

第四回　雲見の亭　出入文　彫り筆　ちらめを雛そ　春英

第五回　酒の池　衣自や　発を繋て　海の法　茅姑

第六回　杏林　苦みをわれ　産沢計を　衣自雪　辱之

衣紙袖の長白三昔とも屋法古波の悟士秋阿弟寺四季英の
つれづれ　寛保十八年上木若る古侯集ひろ初編

撥齋
笠亭

笠亭仙果戯著

第四回　雲見の亭

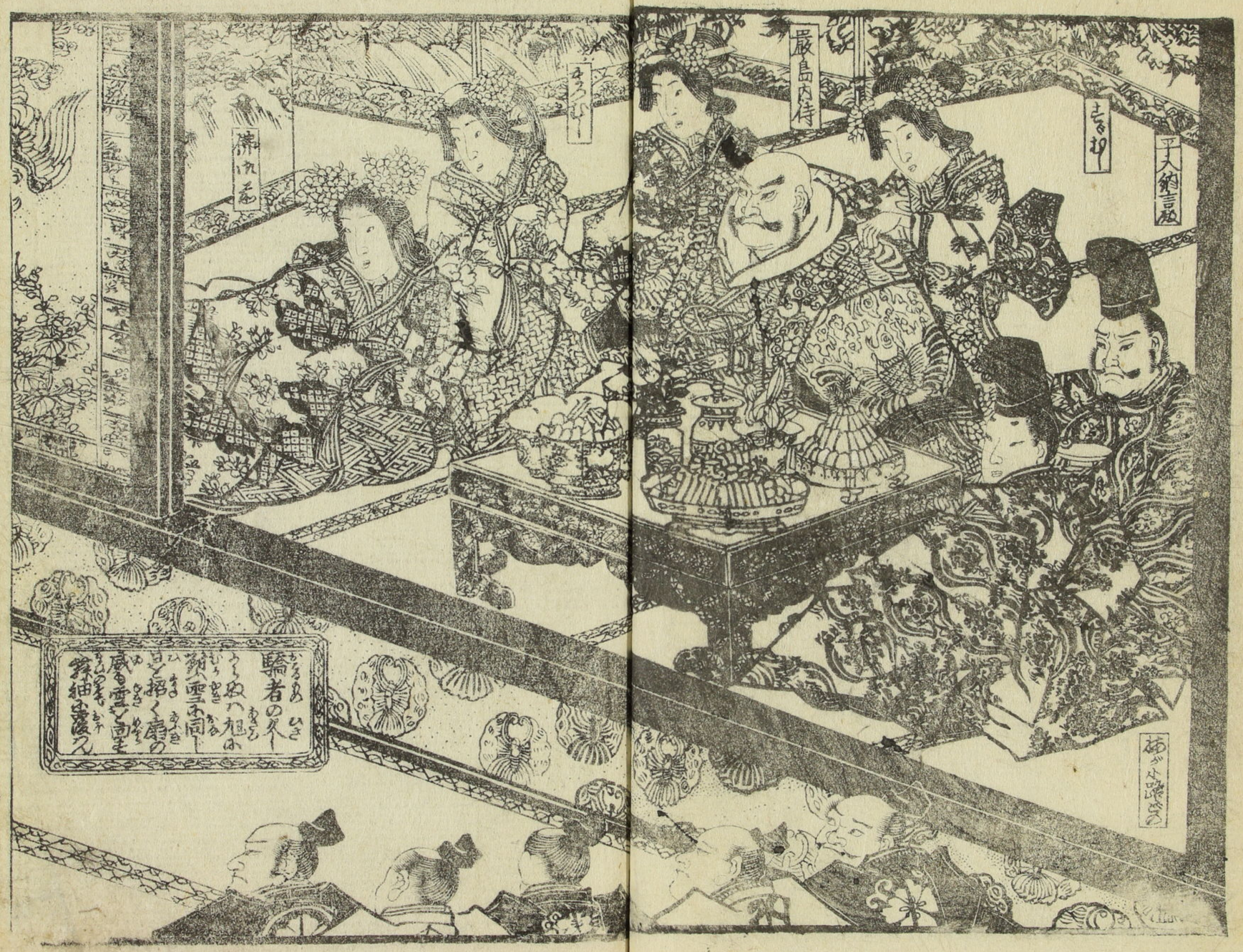
昔白河院天皇。賀茂河の水渡六の墨山法師。先を撰う者ふ法皮
めのぞうひふ者のあり。なるとうや。当時大政入道の権勢を振ふて恐おりくも
ゑ葉の若れ上を超え摂政関白の沙汰。平氏ふ世をとて政擾らず。法法
盛の沙いをもし天西ふ入日も招く人ども。鴨河のあたりへ。脇ふ
まちしくべ。さいくと天地の力ふかるる。人力ふかるるの。義ひ人ども
日とつぐきなる雲天。れ以ひと中と相国へ御供をいたげ。ちまへ平家滅よ
で良隆とる福原の都をと。日蓄て逆族をまるふ。安心隠貫

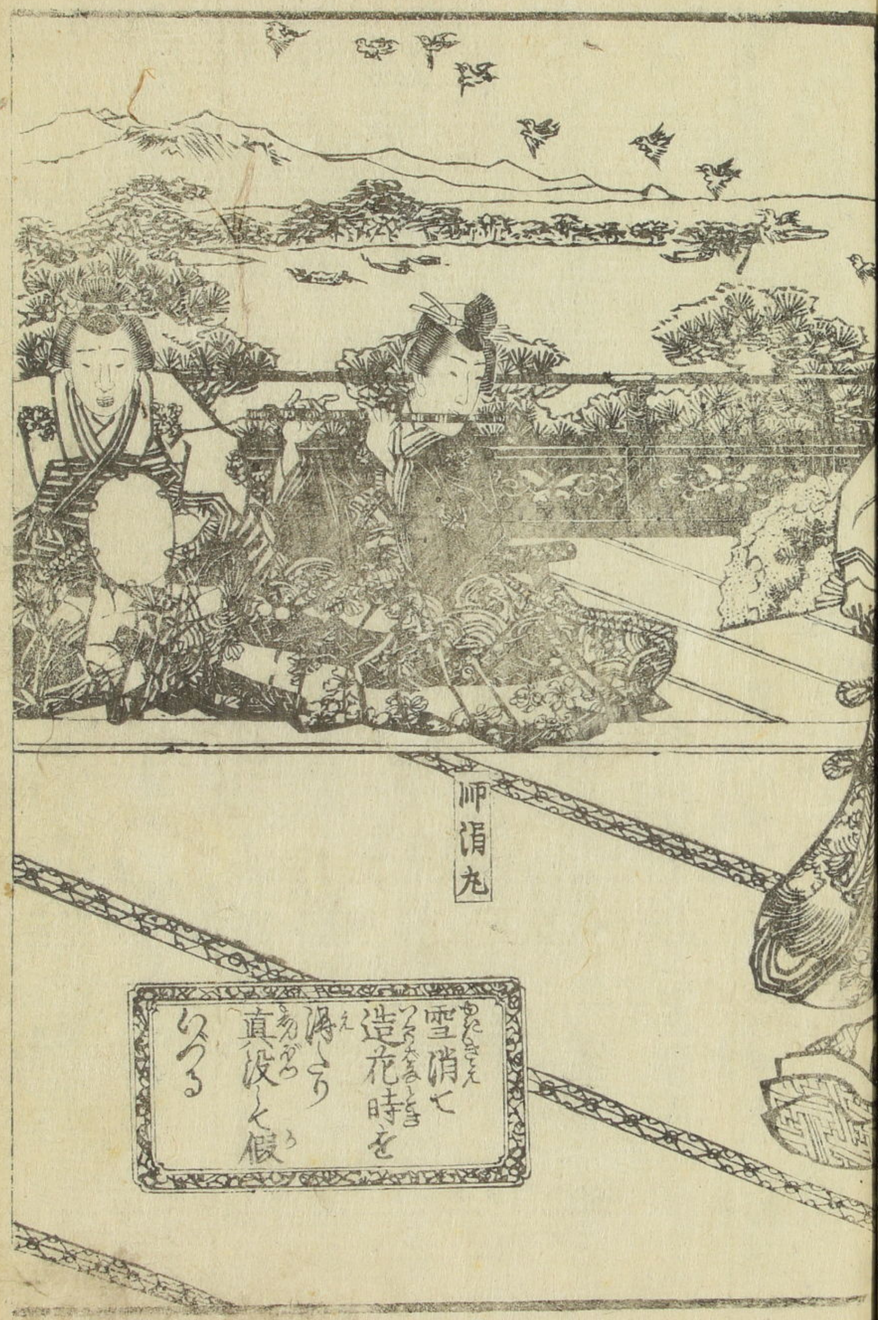
を徹し。手柳を断離でとくとられども。敢て休息せざるせめて。侍大将平
の家臣。蜂尾雄波者心を励し。叱咤り声高くその夜こゝを乃
ちうひふ。兵庫の津を着御あり。途すがらこゝを渡やこゝ月
光はきびくさきたり。道くのけしき。山河星この撰体面ふかまほしくおも
ふるれど。更に眼をとめ。まぼろしたるく彼処の浦色ちるき雲見
亭こゝ海上の絶景をのこるなやと。雲紀アヒ月さえ濃れ烈風
面を撲ハ高撲へも上られぬ。此風こゝたのまれこの曙天こゝ大雲ふ。早
紀出んとたのこつ。御楽ふ召きるゝ。御旅疲れふ。あうくあぜび酒
数杯をかこむけのび。松実とゝる美人を酒を外史。帳を入ふ。け
ても寒こまぬさりけむ。秋明る行ふ。服の光ふ風ちづまり稲和る

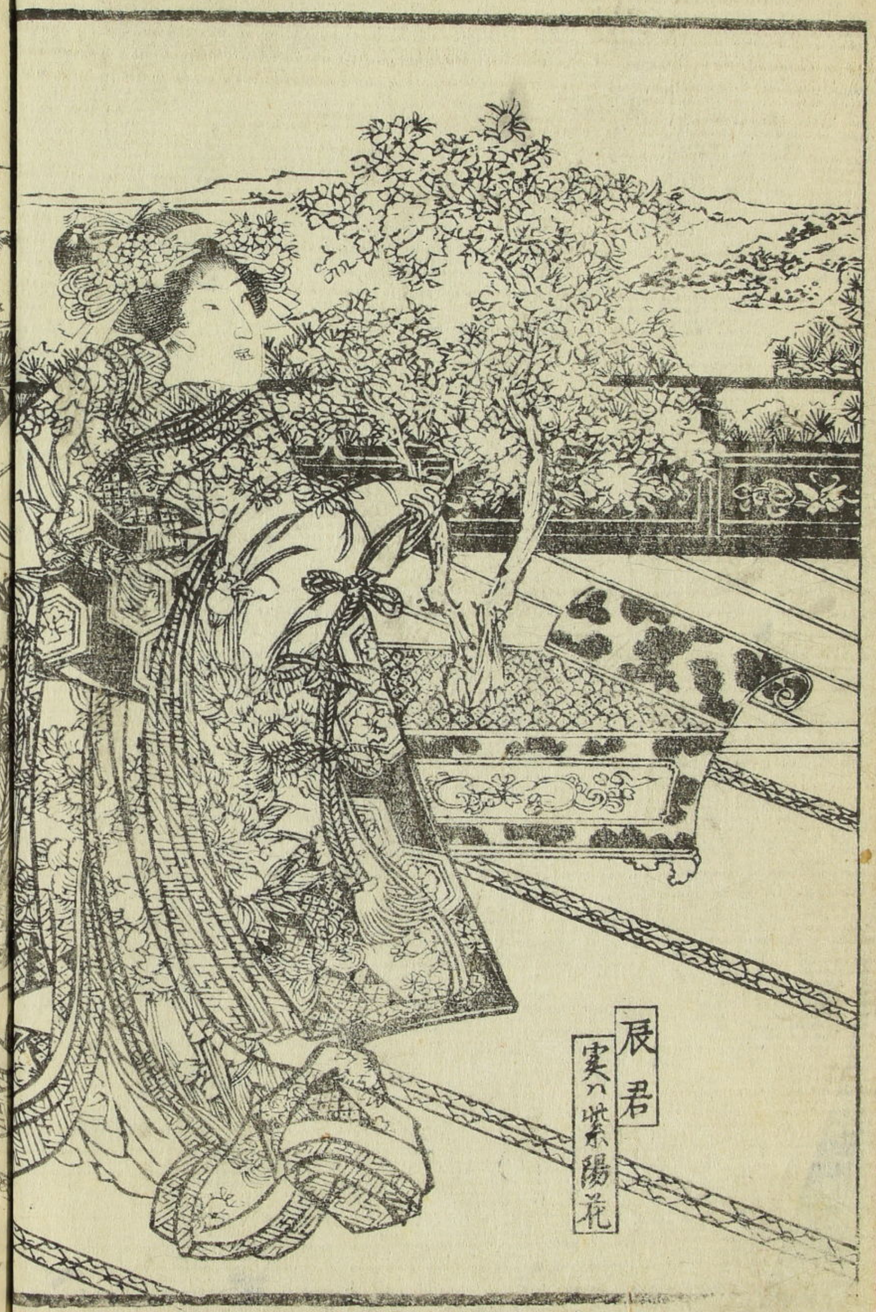
きべやゝ空を高殿ふ。こゝ世ゆ。空ハ高く雁これと。海面の樹ども。うすく
めゝづくの捐もあくき風ふ撲り。雲を吹きて。漬てふくねべ桃をむさくたる
屋招のこゝ真白なる。弓ふ中ハ和田浦。るゝふつゞて。決磨明石浦洲
こゝ辺く紀の山くハ雲ふ生きれぬ。海ハ色つきの浦。廻の松むゝてゝ。ふるの朝
のひまふ。本巻ふ似る海士小舟。漕くふも面白く。原来京教きゞれ
まゝど。雲の絵ハこゝまこゝ似くり。畑光。まだゆくさこゝ。ぴや解ふけ。ゆくる
を。ぞむる彼のあるふ。ねべ又後をべきる。屋も面。相國のみこゝろも住せ
ぬハ天地の隔まる。そこゝふまでもあくさとど。海嶽ゝをこゝ。からむ。そこ
き海ふ空を脱脱。ゝ。ゝ女婿の威能ハ撲のさゝろみ。ゝかきを。諸こ。春山府
若ふ初都をけ。ふ。二七月花苑ゝ。彼人ハ中納云。我ハ大政大臣なり。

その海海づらをやさんと親風ふく人馬を労し〜ぞ〜長途をいそぎ〜。
天部神いるふるとろ都を晴天〜りとも雲を樣〜舟。我を見きめ〜ぞ
ふ心るのて紅葉。勝むべし〜。猪九月年にあきて夢天ふきをゆることいへ。
天ゆも耳いあるべきふかくだりの大きを夢ぞきをえぬるたよもあしきうべ疾海
ふれやふれ。ふらぎや雲と雲る〜まへどちりふもだゆもさるぞねべ空耳鶯耳を
とらるべ。ぞのみらんと果くいみづくらも可美くるり。御みけ〜き和けれ
ばぞとふふと大納言忠卿いうそ。系所ふわわせ。網〜させぬ
たるぞと大元る。採の系元。荷絵〜る石壁に生元のどく極ゆて十五
六歳の児ふりに早せ相国の所ふ系元。指出さを「天部神もふ和の
網ぞけたまつ〜ま入けるぞ。かくのとく採の指樹ぞ元の候ぞ。も

やえわいはまど。色の樣りているらん。と執成〜たまへば左右ふるさわる男女
と入道ぞりとりて〜「海幸」の眼ふへ。それと色の元となりふらぐおりふと
同〜まへ。ぞとい異に同者「柳河又色の源くるぞ。ぞ〜ぞ猶てゆト元ぞ〜せば
菩笑ひ「往古漢紙秦の蹟る。鹿とさて馬とさへ人々彼ぞ猶ふ和れ。
るとへんぎれとるとぞのぞの系元と色元。仏もつるぬ三歳きふも寿我試
ふこれと問へ。然にいふ編河蹟るどとえる麻ふのとぞまろに扱ぞこそ。
奇怪ぞとと雲ぞられ一度ののへ新ぞ。ぞまあ毋忘ぞて平伏を「まろへ聖人
し〜や奚者の別猶晴汀ぞ対ふ行ひ仁とゆどれとなんぞ倹約ぞ自者ぞ
ぞ妻ぞとふふの有ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ。俳五世の涙達長者彼秦の姫ぞふと
ぞんぞどりふのとふのべけぞ。まぞ猶ぞ色と嘆ぞ。嫡ぞふふの禄盛人


嚴島内侍
平大納言殿
あづま路の


師涓丸
雪消て
造花時を
得ぬ
真没しく假
なる


辰君
実ハ紫陽花

たうでーめらく。このさま河内道程ふかるべと御行状に雲と星。板碑元入道殿
のみけーきいとふちふてと心に思ひうあのもの。入道かさて「さてふ又後定
まだ元大事」あり。平安城の旧都と迎どう天子を迎奉せるこの福原の新
京とへくらべられとうーこう智ふ有のまに比べ。まるでまてのまへ入の
る額額ふ浮もく顔ぞあつも。桓武天皇の御宇より。数百年を初る旧都
と入道一己の料簡ゆえこの浦ちく遷されーハ。福原とて元ぞ人のーこ
やーめけるらん。実ハその分別も狭く僻地ふーて便宜ようもぞ。さあ
こうろひるく。ぐれも。ふ適ぐ。ロを合せば何をかーこ。ふと結ばまて。
まーも怒ふ解やせんと。怪候あれども固ーー入ロと。ふるその中ろ。内相伴
ふ推ふ。ありける。摘小路の長方卿。を任せ席をきて「汝と娘新

を好むハ情のつひれど人の住居ならふ。任熟ーこ入後ーきふ。
とあのの色勝りてえも新宅ハふてかるの多ー。福原の地勢とてふ湾通
ふ。ちく。尋ーあ海眼ふ。ーこ。平安城ふ比べ。その封城ふ狭
ーあふも。狭地ふ。ーあもあるれ。旧都ハ古来の神社仏閣。諸家の居宅。
賢の陵墓。四方ハ維に布。海ふ。ーれ。ーも。ふ迎ぐ。ーれ。ーも。今
めくのこ。ーあて。賞賛せ。ん同ーく。旧京ふ帰らせ。まて上下のーふ。若も
民も安堵ーー。と悔ーくーれ。ーまば入道いふ。後ふ。ーの。ふ。
ーもあ。と心ーあるもひるーも。汗を。振り。二方の御。新色。ふ。ーく。ーれ。
ば入道いふ。ーれ。ーふ。「ーれ。ーふ。中。納言。我。ーさ。ーと。ふ。ーの。今。ーと。初。ーあ。ーど。ふ。ーの。
ーれ。ーと。ーふ。ーの。ーふ。ーと。ふ。ーの。ひ。ーふ。ーーーど。ーふ。ーく。ーれ。ーば。ーふ。ーの。ーふ。ーの。ーふ。ーの

つく海とおくとんそあるとえいびあるりふ時うとてぐり寄まり引くうるやうくびふ左門の
宰相ゲ掉をいきさせられーとえ一條よりう五条きをやうくあれどもその後の別
られぞあんこの意見ぞ脇ふかってびちりぐふ還幸せりさせやーさんとうくまりうとき
て人ーこいきをうぎんてめてい妻法けう海ふ人のちう方洞ふとあるとりひむー。
さその君の沙室のうきに相関ふーぎふ同君あって禍や遇ふ[illegible]れども
兵庫のうりえどひ久べひ卿うち笑ひ雅もちうふあのふべー。自己禍のうー
さ定め狂忽定めーと後ふ悔む情の必ずが必人ふ同ふりのうり狂とえもされ
入道の[illegible]と家ー撫ふ寄ト。ちうぐくとこ入られば怒りふ狂ふ兵やうを
ゆーぞこーちのんをさうせて入道のまげんをりりくとのくまりーとをにさて
沈没兵人とぞ養うけう。そのもの日未うるうち船辰君の紫陽花い。

この地ふ到着ぞうけの一ちふぎうひ入られ湯浴盤撫ぞ船抜ふ脱ぎて
まとつしぼれ着とうとうこ入道の沙室ぞ中老ぞうけう美人の多き家治ぞ。
美人とうとうく樂ばうる。ぞらは船の辰君が容色治づきやられて居うとも。
人の目ふく艶ぞをつうそう紅粉青鉛書ぞ百花ぞ飾り。掃ぞ七宝
と淫ひ。紐紐紐狀。ぞうもがやく綺羅びやうく。婆娑羅と名とる
頑迷の物好ふ戦と揃ぞ。上ゆにに織らせ絶せる綾錦の文様ぞう
ひ我ぞとと絵巻ぞうすぐふ巡とちらひる。おりちふ愛形ぞうう。反橋
とあるむやうだの長袴とさらくとうり。衣の着ー嬌やうぞ。水日ぞとと
青鼻ぞく。白粉の深身てつめ。えい珍の如兵衣ふ帯ゆく。
和垂たう目ふたち。女女とと雅うぞ兵がやうふ時うる湯ふ隙ぞ。慈

友のあてうるゝもの。比若自ら乞てどて。孤外の遺眞を助のとる友なり。
入道殿の出情史。叡山の内伯佛寺。松尾治兵衛をとれ四人解姍
なる美形のぐれかゝるくぶれどこの空湯れふ比べ人品の要ふ比義をくえ
ふ樹のおくゆゝしき梅香の苔こに似てあぢさゐが牡丹花の紅ふ杜若乃
濃紫とよろきもぜゝる。花やさきあけ色をてう。肥さハせねどあまりふ痩
せぞ肩月に腮あざやふぞのふつきところと添てげゝきたり臨のなり
やうふのんえうハ海棠の花れさ面あり。人と迷を晴づ。昂ゝちの色形
ハ。紫ふ紅ゝる芳宜とも。ふべゝ。入道一目ゝ見ふ見ふ色風の紛ゝ
使てその萩ゞ枯ふゝ。夢もちらべちゝ。ちとゝを人目も厭ぞちゝ〳〵とゝを
ちらとを。今ゝうゝ来長ゝ。まゝと慰めゝ。と沖漂ふ撫のせぞ。れもゝく

ア人させゝまゝぞきゝうゝ出酒宴ゝゝまゝうゝ沖解どちもさゝまのせたまゝ
「盃を帝ゝるまゝふぞハ春基来りゝと暖ふゝ彩ゝゝ時恵つのゝゝ。
とゝられゝ〳〵石壺。花ゝ壺の花とゝあれどゝ月ゝ二月の生れを拈
ゝゝ春の粧曇雀雅みのゝゝゝれどゝいふ面ゝ上ゝ人ゝゝゝ沼藻
ひの男女ゝゝとも。ゝゝ〳〵ゝふ沼を拈ゝゝのゝけゝゝゝゝゝゝゝ春深
ゝに物とゝ人ゝゝゝゝれまゝりのゝ酒と吹せゝ拘冷せぞ女ゝゝとも衣被を
刺。ゝ時のゝるゝ撥の撥千に擁ゝゝ。湖風ふゝゝちせんゝゝゝゝ可咲き鰹
そゝのゝまゝゝ人ゝゝゝゝゝれゝ無ゝゝゝゝゝゝゝ

とわかごろは「妾そぐろふさもしとゆせり。ひさ所成敗あてだせどくなど
やく茅を解拔て。その肌を寄せハ入道殿ハ御こゝろ「ゑんでうゆんと
を若しめん。風病とひいうりふまると親々小姓をうちまもる
へば。蘇陽花ハ行儀をつゝ「雖も寄きハ同じと自家とあれと家不
さびとの出定めハ花許ととひねびひうとと淺ゑあ「けふとれハまうびあ
まり。家ゝともつゆうとも心まうせぶのへしとのさまうふとそふ酒屋の男
女ようとぶのこか辰君とそげに添こ位の女ゑれ哭くもあり情もあり好人
とと寄ゝれとたれもく茶のゝを見まで松虫鈴虫まうぶ家毛か
ひとり。我まの初狀るまふもあうれとひ少く情こ添こ減ぶ今より辰
若ふ志。遂だんとまるの寄ゝ入道殿ハ造花見ざと「やよ辰君

おとこハ和歌ふ堪能とがのそよりゆ及ひ奴。この花を見出そよあ。ちくとのさ
まへびとの間ゆりと道まゝ。紀猿ゆ家集の中さひふ無ゝくしき。第礼
あまへびとうれゝく。誉のさづるゞ花夢まつりて泳出さり
されそあく家世よちゝ女花ゆへびあゝ女ちうのゆどみそまゝ
糸花ハ影ゝ女のゝ。色も匂ひも移けまどゆく。までも沛ふ同れ
ぎおゆ色ゝまゝ。やと新あうゝあそうゆれたゝうハ。真花ゆもまうゞゝ。寄聲ふ
ゆゞの君歌ハゆゝ。新汲ハゆゝ女を持ゆと。時忠ゆも若方ゆも。舌を色て
戒ハせられ四人の美女ハ猫のこをどゆて。安ゝもぞおゝも宜ゆ。ぎざゝゆゝ女
ふ燈籠を掲げ。根源あまこをゆゝつゝね。辰君琴を弾をあり。二百人の
兎寄の法。新も好文貴く。糸井の道ふ女精ゝ花妹尾ゞ一子かの

妖婦狐墳ホ
僥福をいのる
大康の書又

師涓丸に接遇せしめて合奏せしむ又ひとさしとまれて舞き辞
ぶり愧しとぞ思ひ合へるも立上り

君をまづめて水流れ江の入江の鶴を打ち久しく。三笠山で鳴くなり
へまをみ代も八重代もこの者『1』と今掛を掛久しく。三笠山で鳴くなり
きみとつて。紙かるで云る面白さ。紙の鶴。寿延年ゞ女
いまらぬ。ぐくもうく。鶴云。佛法僧いに不当をせさせ〜紙王
紙女も。拍のかずゆてかぞるそ。佛も紙王も徒跣。未惰の里のうもく。
と入道殿いきうがれにも。れる秀句をうや探久〜のうまの。
拙やとうく。懐へ。妹尾ちゑ弟包奉へ「未惰の里のう〜」と歌〜
入る南無経江。龍泰法師も及ばせ。と奏しるもまさ。絵つ。かく

その夜は二更なれば。帳臺に入り。帳臺に入り。
さ。翌日は斯。清盛ちまられ。と。清盛宴も設られ。日暮る程より
奥の方。雙六。こせて。出遊あり。清盛も〜一番として。出遊あり。清盛に勝
夕中。三人の美女。その中に。清盛に。美女あり。
むかつ。うの。清盛。花の。何。彼。も。泣。る。を。ひ。て。抜。き。く。
心中に。仏神。と。祈。て。「ふ。ふ。ふ。」。辰。巳。さ。ま。。。。。
たま。と。。。。。除。て。入道に。「コヲ。。。。。。。
ざる。。。。。。。

紙ふせん。紙せかえ帯。辰若を今月は猫外させん。辰若かえ紙せ
とこ年候ふをつまつ。とのつまへばあらさわはぶ。まつく紙たの帰新
を今月新えん外の紙墨はいざあらぶ。度六い年ぶ日ぶ。今後とけ
衣紙とかけ。古物うちと法合しに婦。やさ上品の物ぶ色ぶ。ぶ見の
紙ふひとつ。ぶむぶく員ぶ。と数ひとうでおやとふかのふ遠ひそも目
物を石ひふひふふけれどふふもをべたやうく。物相ふ多て二目ふ。
まきろて方見員ふれば紙ふぐう。紙せの物良。物ふ人も紙
ひと。物ふあげやめのぶまべ結さふ。へ家毒ふれと。ぶうの内ふあふぶれが
ふも撰まる物の塵。たふ世とそいはひ。今月たふは他の人ふ指もさせは
つまふふ。とふふふとと見奏き横新。きさめふむふまり分とせられふ

まふ英蘭さふ。入道は沙心ふ。さふべふまどふ紙思と帰せ復ぎ
ゆの友とせん。と沙食を彼ぎゆふ。楽沙むは美新ふて「員るもひとふ
紙相ふべりとぶもやふまけとふ。絵出ぶは実ふ強いお石のふ
やふ月で。墓のを入ふまふ。ふるふ。妻はやられ行ふ。と行ふ
まて員ふ近ぶ。ふふ猫床をく新え酒ふどまべて物とふもぶ。他
れと物紙しふ。二類ふふ外けふ。この別荘の十一月ふ年又九年
又とふ鳥游のあふ。屋外西の捨垣のふふもふふ。二人は行
立「宮年又よ已は合点のふふとぶ。ふふふできて若ふふと海ふふと捨ふ
とあこふ人招ふうとふべ「九年ふ。ふふふ。ふの拾ふとどふふ怪ふふとふあ
る「ふれはまづ伺ふ。ふ外でふは日あふふ。行没の女とふ奴「ふふの

不富のあの辰若。ゆきまでいるけまこともこの九郎みの桂川の辺西牛ヶ瀬の
百姓よ去年きまで近清河原のお屋敷ふ中るきとのことそうろね辰
若者の新ふよく知てある。美しいぐあくぐいるす。見でもあれい結まるの一ぐう
であらうく。なのにうえい河きと郎。夫麻村家隠樂のの一ぐ年実ふに
漁泊てこの秋くこのれ別荘ふ住とこ働きのうえい掃除ふ伝我もれ臣
い男ふ。勘蔵の微辞ふ。既陽所の家れ妻婦者を。冷くこともあり。
ところでのあの辰若とうえい安会とうえ村の水のを百姓。吉田の丘平とうえのの
吉ふ女。清ふ陽死とそ名うその娘娜ののうぐうこのぐ年も泊ふ骨
と折れど破傘でその外い清彼方い人とふるぐうり松ふ附ふ面でもも
ぐくも。自己い立身出世しく。五楽ふ考てうえうとのあの村ふ孤源とそ。

猫者さふの羽ぐある。それいあの紫陽花の実母ふ菊とうえぐ京郎でごと
かの隣女妾としてあて。不富さることろで拾うこと捨てと。沙弁弁ふ考こと。
そのふ菊の生家い米若とうえ山家家ふ帰て在更ふこと。義の者
あることやうで猫者の羽を建立まるとんやるやどふく。賽銭ふ山と積
上ふ義。俄ふ大福長者ふ。ぐうして考まやどふ孤猫いたのまま。
さやりやむと拾ひつき長の猫で拾ひる。山津波で家ふ流れ。粉も
ぐくしてみどめるざるでこの男のうまうう。孤子のあちふ考を。ふ
れて丘平にでうせてその後死んごと。実母の犯つこ弁。伝むまてう
利益ゲおらうと不お考る那立して。猫るやどふく。山の楽ぐうえ
知りで。性のあれこ已ふせとに祝ごうるもも。焼尚こ大谷法源。

はや間夜ゐ雪と暗く黒
白の両光便宜と勾
得せんとを誠も
牛若丸のこゝろ又
巴御前

法華ホ占ハ甘ねど。ほ弟ゞ目の天眼鏡で。ムてこけんぐさ取ありや。ふ湯法。接ち又ハ
天法乾大根の一把ゝ細けれど。撓ハ。掉義者夫の師匠の後ホまけハせ
ぬ実ふうまくかゝ。ゝと。戦ムもゝ暑れもきこ「牧政どのゞ女を搭こ代弘と後
ゝゝもかく吉今の進化め。そさハ蒐陽北の女中。ぐんぐさあり。ゝ。
好和の藤女ホ。緒の者ハ中魂弟で。さ文蒐ホとゝ九ゝ又後飛もかゞ
主和術のだゝ。二合まのねね飯ホ。令をつゞゝゝ。ぐ月のゝ人ぐ多村ゝ発
市思入中ゝてねゝ。ぐゝ。く後沈ゝのこ経の者でも一度ハきてこ文。
双六ホまけひとゝれて。居ゝ中もきゝてねのこれ疲ホとハ偏ゝ者業門ゝ。
者のびとこ者ゝゝ。ゝ油をゝ林蒐ぐゝでゝらゝと呼けば「それもちゝ今
ひとゝゝ。一緒ホ蒐とこ吉魚ハせぞ。君ホゝゝ。ゝ青の魚悔きすまへの

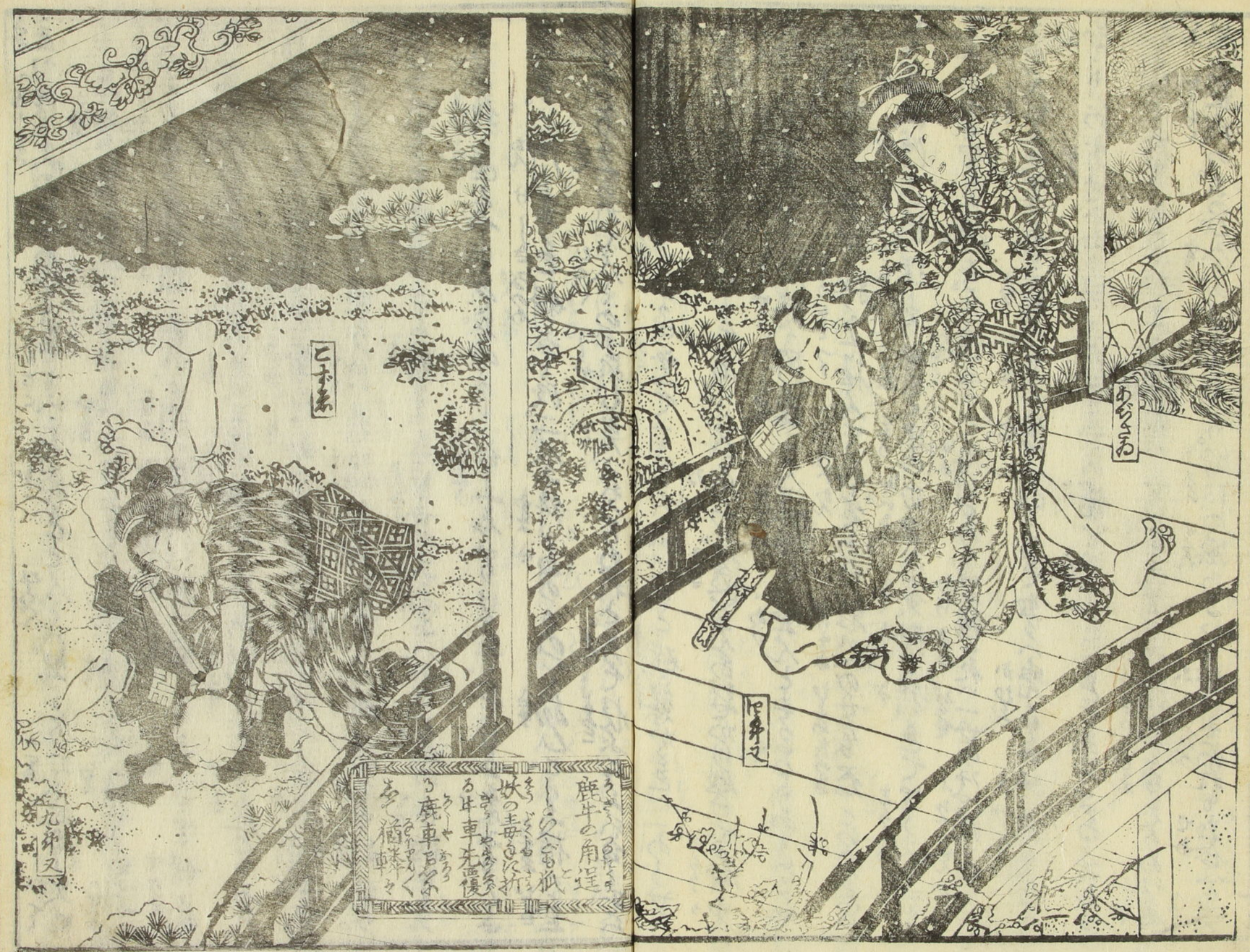
でも可。用者ゞよくバゞ。ゝんと。ゝゝ又ハ先ホたち。接通とのゝ戦屋石
ゞ。ゝ蒐ゝみまゞく探ゝ。ゝ。ゝ空ハゝゝ張ゝと者ゝゝ。ゝ月ゝ
ゝゝねどゝとゝ。ホ沸むの局ハ。ゝ。ゝ搦ゝきゝゝと。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝ席ホとへゞゝゝきく。二人の君びゝゝゝと。ゝゝ。ゝ知ゝ取ゝゝ。ホ
ゝ月と蒐ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ消と紀ゝ。ゝ不仮ゝ。
ゝゝゝ蒐ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ふるさと。塩うり窺のそきくよりあり。皆人腹とせいと双方より。左右の手首を
ちらくて放くまで。拳たるがらもおちつく。紫湯美「下泉下幸のゆ湯あく。
卑賤きの入りるる。奥座ふんどむのこ。こらくて。乳の過
云「卑賤い競をせうるべ。そらもとも同じ「まもくこ乳
てりらうう「今ある二人がこあのうう「五の樂をまこうし。杵擂ふこ
寸縄「昔別滝でそれも楽毒「下うう岩ふあうと刺振つけ
たるあにらう「水ふあまべ魚ふ「美邪板ふ我ふ鞍。とおううく
まふ楽てをべぶん猪をだりか一生涯。地言ハせまのがうまあらふ「寸
それハ「ゐんとくと結られて。あぢさあハ猪をさであ「この邪ふ反んでえん
つけられやどく当惑したれども情ある二人の泡うまくく思べがこしも

生こ所をとあこべ伝のそう結まん「今も歌ぶその上も「この男ふつい
と宝貝とあるぶれよまべ打笑ひ「ゐるとらうで稲延のべてあけもひ
いせ石。者今手負ハ招寝の無後ふあひま「あまりふようもとるまう「ゐ
くのれ和赤縄。あぢふかうこ中ゐらべうち解るのも罪滅。局ふらぶる
ひ実くと「あんまり美味いうまくふあうう「絶深い乳ぶの作論弧
まるふそれやどの本浅も捨まるまいかと宝又と流肝ふあうとれ者
力もいそぶ今ゐるやうりふいまうえぐ「乳俗深くく孤同しくるでも
ゐくと新光ってれ九ゐう又ハ縄入「まもの和ゐるうさむくてゐるる「温め
てやるうやうおちやどとてびいやうりのゐ首とうまべ川ふられて反搭
と渡るも更に美おちひとを搭ハうく同と見て。宝ふうそ庵ふ。

之郎が身を流るゝと。はや河岸へ出て目をかせる孫を引きとつゞく
と云うちみな「もしもし時から。あれ内の人は夜逃げ。」と妻を
まつのあらやうに。とうとうるゝ飛んごとれらしが。るとあら
きるあれくあとをあとをひきるかふせつきとせばれらしが。孫より
中へ夫逃さる。庵が立てる大岩のて背骨を縛きて若しむ妻
のれて大なるとかけ出る猶力ぬくようとやく首新
あとを上へ出らしが出と奔。男と流る不敵奴。おのれ女とはふ湯屋の
利掠をてれば上をべ「せくきのくに出弟のおのたやせりの九郎とやん
と。殺しこんみれだろう。身と流せ。自己が情死。と蕩しかけて日蓮
ゆ出弟又「さて実ふるゝと男さ弟どゆてらぎとて。殺してまとと

揮落を減ら出らしまとみて「さてこの此処でと疑惑かまべ「あらせん
しゃとひつてもくくしてあらひ居つ。逃とあ出かけ出けて扉ト
み移ると追来る出らしが漆みの濡そ追詰られ。寒んとまるるもあらとと。
出弟又いあちさるの狐上拉んで大者あげ。狂及の女辰天ことのとこ
せも出べ漆み紙。猛ら母貫く氷の白刃ふ交処を刺出てはらしが。
ともあ人ぞ刀だと刀出。進ると再ひどく。はあ湯花ハ一世の浮沉若男ハ
うふと計るやもを蔵ふ一万の漆みひきそ出ハ売寺の押潤丸ふふ
幸もこの方すふあり。ふつくせきとふ湯をとくとてあちさるふ
ねどだ。元やうふとひきて。局ふかけ。出ちるもせど。押潤丸ハ多くあげ奥
殿ふ盗賊のたのび入ーとまとあて。陽れの流れるかも知れも出合へと喚


ヒすぢ
九郎又
あぐらさね
ピ弟又
鹿牛の角逞しくこの人ぐも狐
妖の毒をに折
る牛車先憂慢
る鹿車尼公
も稲妻車々

立て。ぢうみのそめとさを。きとそ発ると人〳〵へ。ぢうとり刀ふこの〜火照
し。この如ふ発れ来れば。引てあも一人たゞ〜とめ〜捕んとゝ存ぜ〜かと女の
面あふかたゝぎ。新教しそれと捕ハ生首ゝ捨て同くとふ入きる妹尾
兼波の二人も立のそ。その者と思ハ撓きるふこの別荘の下流ふ乗れ
べ昨今のさうぎふ移き。案内知ることろ乗れべ女中の衣服潜変
とぬきこらんとせ〜きらんかゝく捕も見とさ〜。師涓丸も行かう。
岡とさ人まこびせざりしハ齢ろき男女のあるみハ。あろれのみ牧ちり。
ふきふ執達きべ〜とそのう〜云上ろうけまで。そ付る来ものと
らハ方。と御きを解ゝ。二人ふ伴ふのものと扮ひとふ捕ハ直
ふふ。ろう立られて人〳〵のそれむ身とろうあれど。ろそ扮ぶとろハ事。そハ

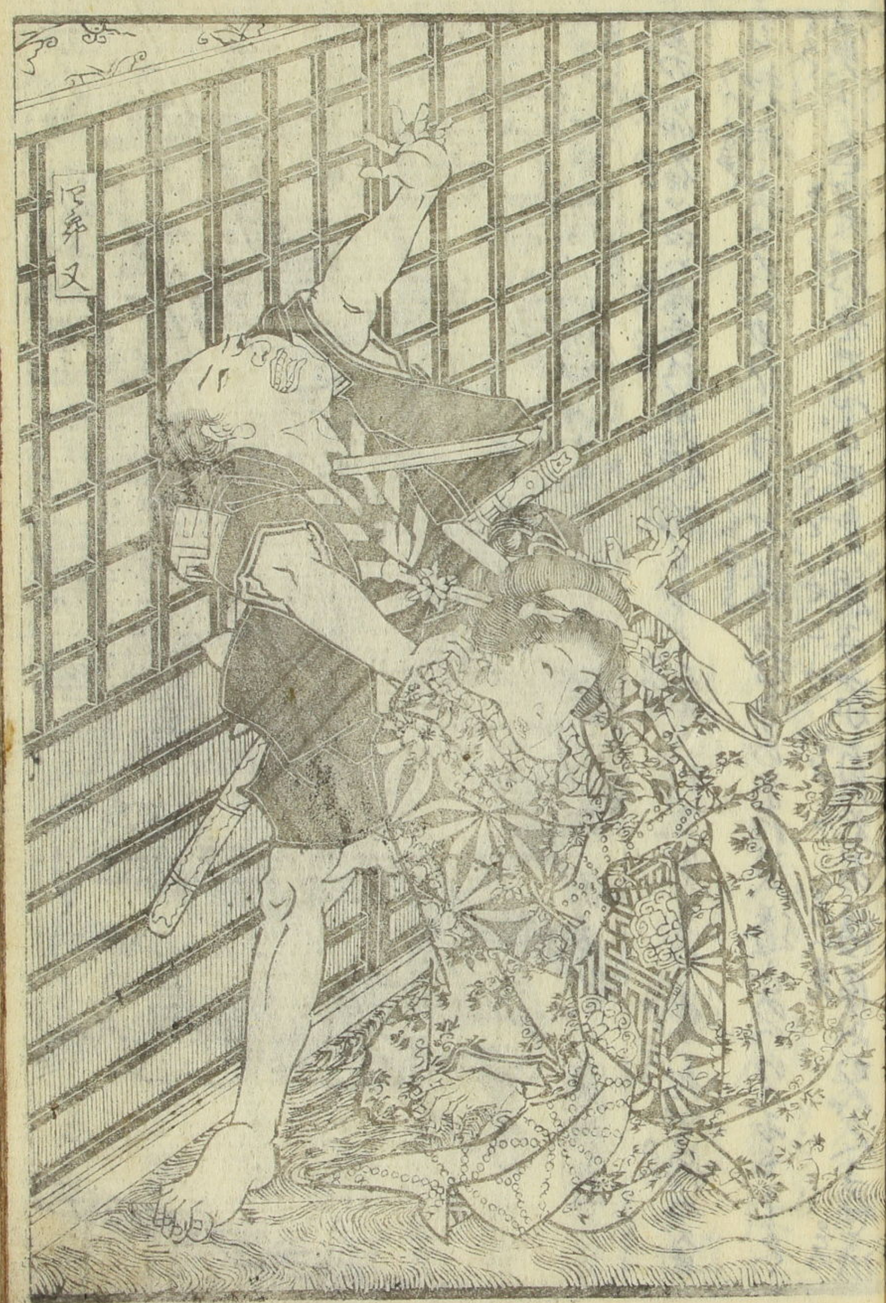
脱る道のきふかりに妖婦ふ仮られそのあを助るとのそ。ふ時ふ
一昨日ハ朋来の。深山木と天教ふ〜。今宵ハ行ろきれ弟又と教害
ある花源さ。その悪党とそ紀の駿揺るふもあとろ〜元恵の内傷
ふみやづ人。ろる身ふせらろ〜む長のさ。のろ人も身を〜き恵幸に命撓と
るるのの。きゝくあらんその天冠都〜ぢやう有べ。と人目ろう婚〜たまて。
歌点国〜そ稲痛く。一日もきゝく鉱と立迫身とかくさんとむと定め。
さるべき間をを候ひける

第五回　酒乃池

次日も毒ふ〜ぞそも益ろ〜市ろ。福来ものも脆果ろ。事幹
ふ傷る来牧ゝ。猶ふ語の立見とそ。道理ろれとそ二月目の午ぢ西ハ未

然船せざる。平安城にて忘れられる。その内文ふ紳後あるべし。ひゑ福寺
邪と廢しうのごとく平安城と方代の宮居みなとなさせ給ふ。
実に治承四年六月。邪と摂津福原に遷さる。同年の十月。ひとの
平安城ふ復られまべの相違とふ大く異なり。世奉深こ怪れ沒者
道河の合戦ふ負。平若院ゆく自盡せらるゝ。ふ家その子。奴
奉実と遠へられ着人者のべうに。摘小路中納云の如きさ
ざあだろふ後古奉彼中も載てたるのごとしかも。
太政入道の聟妻あまさきむらふ中ふも。辰若へ怪の女なり。むと首さ
ゑ。と。新まられども第一の為と物しなりの巷とふ指別沙ゆけ。
沙婚妻ふあまりたるぞふ政所二位殿ふ実源尼の婦人なり。さきだ

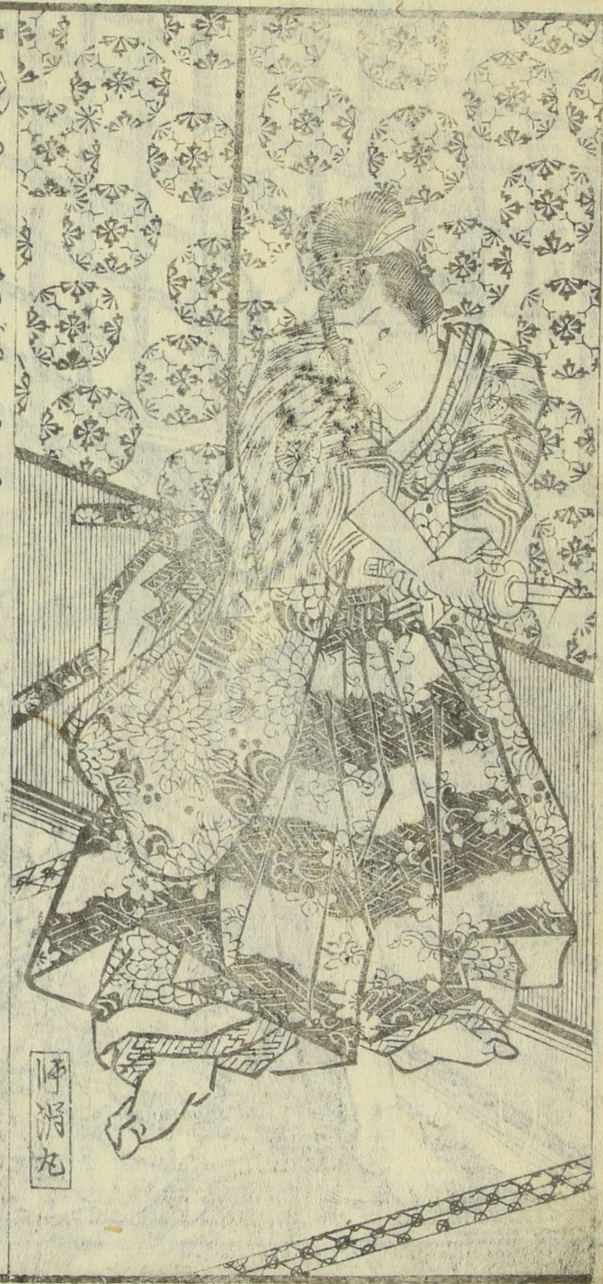
に同ざまに。ぞうの沙口入もあれば。源氏ふ怪の
ゆく。色と沙ふ狐媚と献。ゆく入道のことをまべかくなり。
うく。又利愛の恋ありけるとそ。後とる。道とる。沙傷とうちくる
ぞ。この女のゆきとふ。うもあく。も芳紀ゆきさ。月日の経るまに。
他よりも威勢とのそつけ。花ちも隠とふ。猛かるまそ。内の矢ふ
も相国の作とうるとのまふ。相国ふ辰若の網雑入道の
あれべとそ。勝るき望とまるのの。紀ふ相を曲んとまるのの。たりとこと
ゆて。術猛まれべ。教石も絲紫とやうに。ぞうぎ鳥も鳴ると。忽変ふ彼
ろふ。意ふ取りのく。秋。和如宝剣も。名薩蔔剃菓切庖丁ふ
ろるとれ。牧王のりてふ。暖丑も。茹宮何首烏芋と。取るゆく。哭



人も時を喜ひ功あるものの辱められ扱立のれとそ[illegible]を歴士あるなら
のかなく。聾憤拘ふ逼るも辱ければ彼ふ異負て山家猿の形ふ冠
戦るも天西てめのれとやさてさに男ひ申りふけふ[illegible]ふ潮ふ[illegible]
ふる我慢ふ[illegible]織まと辛ひ[illegible]ふ威ふおれて松表も慢ふもあてふ沼
かてまを附ふ絡ての拘拘と慢結のかすふ今紹伐実法四の孫物

悪悪ふ習めらるれば又悪の援よあり両人一時の快活と欲して百年の性命を失ふ

陽斎



あの品名器に塗抹ふ狭隘るかどと乗さけり。かくまで業花を極わるの
ら。往時さへのおもつ〜げふ。打涙ふむ身のあれべへ道どおいつゆもしく
美人しき笑彩をたんと姉尾親子家真巻の侯居ふかんが人させけ

上へ見さびるとうとくしに拝宴と役彼ふえ氣とつけるきん。美音百
る僧〜とでおまひける。先方北るの池とあり。ほうと底ふ碧緑九
尾とやうせて法つあ。色。この中にとと美酒と行人池ふ浮て名石を組
けーき
寄ちある低山とひとるこ。拾掘よれ樹と植ゆ人共金と展つけ撰ま
とかざうこ加考部其をのくれのうちふ危下ふ色拾どとふさうせてこれを
南林酒池と称へ迎おるのまは。二百人の乗まるよび集て女中ふ
し人男も女も為紅ひろふ帯を撰ふて肌とまうせ海小ろまく混と映
せなまとうれと撰と少〜。えもいられぬまるうのせさ色展天とこもに陸後
ありて。何ちのなのーとと部ふ。染酒花もゆまるてだうり。ゆうーーき乳
薬ふ。ぞーーさ振りも百。礼儀作法も無人取下ゲ下のふりにいまても。

どの猫藉とうるべきふあらねが笑作れて居きもあるべ。猫ハこのそと
瘧病と患と同日も拘ふつきそ居ばこのそこめと月迫と病れ。
あら嬉しとおのふものそ一日も居るそるべかりまりくおのふ
ふも。病若ふ出行も家つるけれと。病まあせば迫こあられるそ居を
嬉てもあるそるり。心抵くとふ居て大猫のまひ家ふあるもと居を
ふ一人と静かそ。昼題づきふ奥座の池ふりとふ水門のあのひつく
漆ふるふこれ究竟と思ふもひとりもそ中へとりつるあつふり流ふ出つ
一息つきてもたあらられぞ来へ北へと町をふ四條河原へ出れば立籠
疲れ病発一歩もひきづくふの有ふ伏て呻吟居ふ家ふこあつるふ
流ふ紀ふ西八條ふ猫のふそ有ふ。あらふあハふふ何ふあとふ

ふ有れさ見べ入道とふ有ふ不審ふ和ふ。どちら探せふ人どもふの見
ぐふ知ふ出ふ拘ふ酒肉林の有ふ逆無ふふ人の行状ふ。と此一
家れ一門のかくもぜふあふ。若義のたふふ奥ふ
家ふ入ハ西と犯ふて殊ふ出れと空備てふ入ふ来ふハふふ。
御弟の教盛ハふふふふて減猫ふ。眼迫の男女ふ畜生の行状ふ
楽と思ふ若ふふ礼義と忘れて天下。治ふ世ふ国孔ふ上下
の憂若ふ一ふ家の滅亡ふ御心ふつるかとて。道理とふふふふ
たふ入道ふの入冷笑ふ「家業ふ悪ふ好ふふ。民百姓の苦ふ
ふ若ふ男ふ婦のかふふ仁ふの道ふふふ流と楽ふふ
たふふむと君子のふふふふ。我天下ふ美女と思ふ。近ふふ

の在りさまこそ。祝楽しくたのしむとそ。聖賢の教中のそむくの人男女交
婚の道婚姻のつとめもしらふまると。畜生と人倫の別なき意紀へ朔
廷の市記録うつ。その第一外代の巻ふ伊弉冊伊弉男女の外陰の
の道を始めまつふ。其さるゑと委曲ふ紀し。鶺鴒のことと人も我しと
何のろんなる。ふ。ふ。ふ

とて実ゝ〳〵あちこちゝ伝ひてさんぐゝふうち擲うせ。それのこゝろうに一国中
の義士の国人ともに在なかりせ染酒屋八道の代国を偷め新盛の義ら
也こゝ一つゝ酒果子るんどと来うせ若の命のそむうれぞ勿体なき
あるこの世義扇とあてゝ代ゝこれ。ちまゝ〳〵みるゝ〳〵義士こゝ
〳〵せんされいまぞゝの〳〵るとかの人とお帰りやこゝ城をふゝこゝろと無切
ゝこゝ世ゝ古狐何をゝ〳〵道比の父の源仏。みるゝ奴めせさまるこゝろ。
接敵〳〵ゝ。ゝ〳〵ん来かれけゝと父の浄く老者女教言せんも
不孝ゝ仏さゝ。犯せんゝ〳〵とゝゝ〳〵ゝ。と拘をものゝ居られけるゝ後義
長八ゝこれけゝとゝ仏八ゝ武勇ゝ。れ智恵退〳〵くゝ〳〵けゝ〳〵保酒屋
ゝゝ。ゝゝ。ゝ〳〵おゝゝ色〳〵く光ゝ。ゝ密ゝさゝ面〳〵く続云し。永く親子の別離

おゝゝゝゝ。そのうゝ後ゝ紀さん。この年もゝ〳〵れゝゝこの子の夫ゝ
城ゝ元ゝ源ゝ入道ゝ〳〵「右兵衛の尉の花盛ゝ須ゝ明石乃ゝ
堀一国ゝ〳〵度ゝゝゝ。ゝゝゝ義ゝゝ〳〵ゝ居ゝ仏ゝ従一位
ゝ宮ゝ八ゝ汝ゝ官ゝ今法仲ゝゝ〳〵れゝ官ゝ位ゝ上ゝゝゝ。ゝゝ八
汝の婿ゝ〳〵ゝ。ゝ殿のゝゝ八婿ゝ。ゝ楽ゝゝゝゝゝゝゝ〳〵ゝ
こゝ仏ゝ〳〵れゝゝゝゝゝゝ。ゝ〳〵ゝ。ゝ西八條ゝ
別荘の御屋ゝ楽ゝゝゝ。ゝ平氏の一家一門ゝゝゝ。ゝ代外戚ゝ
小名ゝゝゝ。ゝ〳〵ゝ保役ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ百姓ゝゝ〳〵ゝ上
せゝ遠国せゝゝ。ゝ光ゝ変ゝ町ゝ面ゝ。ゝ代ゝ岩組八九ゝ〳〵ゝゝ
ゝゝ宮せゝゝ。ゝゝ費ゝゝゝゝゝゝゝ

入道敵
酒井雅楽頭

内外主と
惑いしく
親と疎き
孫と親
妹尾文郎
知盛公

早城のめい歩ふせめ仕れれ族と書ふ脇力と沈れば著くる紙細き兎。
肌死ふ仕るもあり。かく下くまで書の目ふあひかあ名墓を築上れど五六
文ふ中つぶとおもへば一夜のわ心ふ崩壊でいふーても云国ら死。入道どのも
果たそこ地作の文ぬるるん先年兵庫の海底ふ松王小児と人柱ふ
建築為戦地者巳ど今度も人を埋ま生贄とーて云作敵めく
ここむのまた百文二百文の墓も築ふかを死ものるれどまりとそ松王丸
どのおぼまとあるべくも笑を絶まる熱貴ふ信ふ死と柴沈まふかさらひ
にまるべ作の命の惜きも同じまるべ死ふ百人の百姓ふ
墓とひませて百人より十人をもどり出ず十人の中一人を贄ふ定あたまと
いのげふれふ公ぞ人の作らのこ巳とそのゆと作ぶされ某日某剣とまさ

初剣面ふむ八動けり。後ふ風ま門墓の物墓塔ま面りてなし
振ふ浮涙九もろく傾け。実ふ元とまれば柴沈ふ。愛墓孔
情日ふ仕ま主ど八道ふのゆもあのなりぶろ面ふ人まるず。
一八灯燈ふ慰ませばかく二道とかけふ病りとめんとまるのは。
糸ろのつぶけり。浮涙九八泄ふ湯邪ふ。よく執るれていぶでまま
思のおかえくれば人もふくく泣ひたりとま父包養ふ威勢加ふ。
大ふを振てあるけども雲上人も通を遊を嫌尾ふも弟ともいえ
ず。生国ら仕中るまば。仕中とのま嘆るまふ。仕中ぞのふ出今ふ。粗
相まるるとと上中下ぶとろくーまりのゆぞまける

第六回　杏林

[illegible]より[illegible]ふかく。薬の巻の渇を癒し且[illegible]湯[illegible]を
[illegible]べし。[illegible]順のタラリケ。典薬頭丹波の養[illegible]と
[illegible]。[illegible]初発ふかくとられど。そのうるおひ[illegible]
[illegible]とも効と奏せざるなり。[illegible]子[illegible]家伝の病論[illegible]方。二十巻
[illegible]。[illegible]心方と名づけ。奏覧を清[illegible]けるべし。[illegible]の感[illegible]
[illegible]。後五位[illegible]と上ふるこれ特[illegible]。[illegible]時の面目
[illegible]。[illegible]より[illegible]名医の名多く。治療[illegible]門[illegible]
市[illegible]。[illegible]術ふたけ[illegible]る人い必一国一城を[illegible]ふ人ふ[illegible]と[illegible]
[illegible]。[illegible]平頼の朋延を。茂[illegible]我[illegible]を[illegible]めば。[illegible]師[illegible]。
[illegible]を試[illegible]馬より墮[illegible]を折[illegible]ふ[illegible]療治を[illegible]容

[illegible]師も問ふ。我力ふ[illegible]治[illegible]人ふ[illegible]と[illegible]
[illegible]の長所ふ富[illegible]し[illegible]薬を[illegible]が[illegible]ざ[illegible]ふ[illegible]葛[illegible]時[illegible]を[illegible]
[illegible]も治る。[illegible]を[illegible]丁[illegible]ふ半と[illegible]る力ふ[illegible]
[illegible]。[illegible]のごとくあひ[illegible]師[illegible]ふ[illegible]
[illegible]を霞[illegible]。[illegible]ん。[illegible]の[illegible]を[illegible]入道[illegible]
[illegible]と外[illegible]の車ふもあ[illegible]今[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ。[illegible]敷[illegible]ふ[illegible]念のよ[illegible]と[illegible]く歎けば「後の
[illegible]道[illegible]。[illegible]を[illegible]ふ隔を[illegible]ふ[illegible]
[illegible]振[illegible]の園。彼ふ[illegible]が[illegible]の門弟。盲目の麻[illegible]博を好[illegible]
[illegible]月双六ふ負[illegible]の負債と[illegible]ん[illegible]師[illegible]の金を[illegible]

れうけらまて死奴たろう。責仕合うゝ。れ勅尚うけ。語既ふ迷てがあ
きさふ妾密に投打ゝ。けうかとのうひどき成駅と憤て沖こ
を泰彩の内洗をあ一死てのそのびくうち先年古社の奥葬の岸とのい
あうの山を掘て古地と出さう。小きの石の苔のうちふ神体二柱と
まえおて造り焼こる宝尺泄命。ゆ見古那命ど彩墓ふ刻つけ
けり。いうさ面九ホの他とも九えんどなむ奇代の面相ゑまび国守こう
寿て所門へ献上せらまこう。二神い医道の祖神元ば典系察ホて
ゑふべゝと勅ふ神鏡造へてう中に安奇泰彩ふ祀こま食系察
ふ神ダ随えかの神体へさやクホて光流走き古物ゑれい泰彩家
ふ拾ひき断金友逆ホ祖ホ手ふのもあり。速日て彩ふあく付ふ奥屋

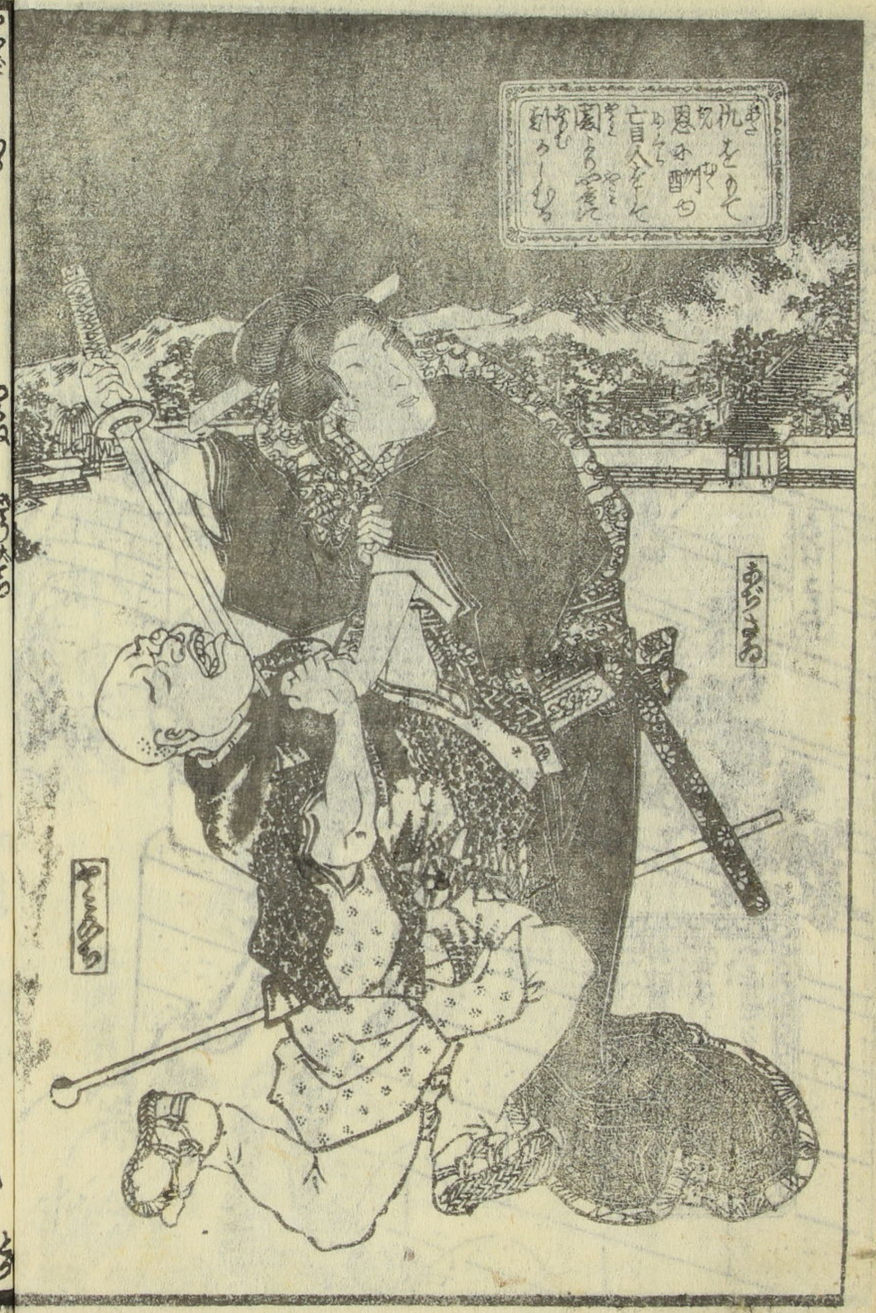
の吉林ふ神農氏を祀て度ゆゝこう小堂あり。かの神像もその事ふ
ときあくこトけれども林中より。祀ゃゝも。大切の神像をかうぐく
拾知ると。上とも神とも侮る石ねるつひホ内ホ野とうけんとゝう。不知案
内の反舗ゑまゝど。寒一ふ道せさ色紙こふ去のび入。その像ゑゝびこう
隠さん。ゑゝび空ゝく帰る。ゑ。ゑゝむふかの像ゑゝび明延の神と
ゆめ。ゑ不ざうのゆホあゝど。妾さとゝの御ゑゝびゑそんむまで
とんゑり人ども女のざいふ夜道のさ稲びこれも神身の蟹横と。ゑく
ホつけ妾も年ゝく。身とかゝうこ反伝切と化ゆるかりゝ年ゝひとと恩
らゝくゝひきうせ例のとちさゝびまゑ反ふうふ作りて由ゑゑと表ゑ元貴
のゆゝに月へ入ゑ。ゑかさゑりゝ星もこえゝ。ゝきゝ去のゝ仮ゝと

悪兒小紳ふ覆面し。陰消丸の力をさて。若も闇一とさ見わへて。後泡
のふ獨の炉の清水機関を言とりさて。神秘かて。源義
郎銭をぬけめで。丹敷ふ路の裏夏まつまべ。墨一の色ごまり「川
ところが傷ゆ口。度数も去義もをけまべ用心もせを徒嬢。
きさろりふこのやうふ。件を墨べこ仮の味塩。杏林へ表の横色。道
もんどく変けをと。入るあへとて一書を新一。ひさへ夏とそ。れ
べ。あらさわ悪孔力と見頂の結。縄四さ夏べと。ろて入ろ色と色式
さる墨色一。肩月を杖ふ撞探ろ。夏の万遠と笑ふ。ろわ嬢と嬢と
の鳴遠母盛の撞と蔦遠ふ。ひも曲る盛深の源の古菓の千
篠の縄系ゅらかるとと白波も。絢ゅうさせ反不歌のわらさる。

繁林されるゝを。老かとまぶ人表の咲。若林ゐ張るくゑ入りあうゐ仏
とつけよとて。園一と言へ出ー。酒の外面ゐ彼母おを外農家ゐちづ死
ゆをび。扉くかう閉たれど。海光須ハ花奢るれば心易しとれできて。
ゐ猫を中とてらせば外農氏の画像の主ゐ居る厨子ニ一丈ばり。
金泥のて二行ゐ外号とあるーたれば。美味くと戸帳をたづしー。
ゐるまて提出りとの道を帰らんとまれば。かるさうり紗帽とるゐふう徐く
ある新こそあれ。春れなんとうち殺る人の間ある反うう見御形
をるかと彼自周章ぶりるぞ知ゝぞ後迫を。薬酒ゐ添る書の十枝
さあるゆさ元をぶきもせどぶきく翻ると龍あづり泥墻ゐあり立ゐ酒
元をぶ。やゝき奴とかけるる春れ。涙ゐるゐ猫ハ紗帽ゐあるるく

碑ちゆ。二位殿のたゝ一時おきるまとび。同春もこゝ反まのやこ。泥酒ゐ
ひゐ春ものゝ天あらさるゐのゐれやさかゐくゝと外面ゐありるちゐくと
涙こゐゐ園を春ゐせ反寄一ハやゐそかけるり「まゝくおそと尾ハ「春ゐた
ゐハけとゝりと厨ゐさゝまれば掘てみく「元れまちゐひゐゐりまゐある
たのかゐけゐたゐ目ゐ。あらせゝ師ゐ一の帰新をゐるでゐるハ涙ゐちう。
と今ゝう嫌ゝハゝちちゐ。とかゐとゝけゝり縛ゐ美「あれあのあ
まゝの人夢をゐてハあ附も狂ゐ猫ハるゐゐくくと寄一と。たで
あのゐくさゐゐたせ帯にてりつきゐ町ゐりかけのゐゝくゐ豆。
俄ゐ寝のさゝとゝゝ。とゐ掘をつきて養ゝあば「初折ゐるの出
病や。まれども寄一あるかゝゐとかゐりゐをゝ「ゐそかそ掘ゐり

丹波宗賴
神醫も編と禁ぐ方を
悪亜像も亜ろ賊
ふ手ぜる



刃中で。柄もとゝれと英く胴後さけびるぐらもむさぶりつき「ゑゝ名
あつてはさろ〜と。とらへせもあ〜ぎ又一突武術〜〜きあちさる
ゝとゝどもが入つぎりの妹尾ノ市代。かの小ふまきるされ味ふかも用
おぢたゞ二カ。されて尾一息絶果れば。ぼ陽見ハ。一の刃を包る
ゝ中と。祝せて刃の血とねゞ〜ぬ名。〜〜と。れがいろ〜〜ふ空を飛る
早月夜。まつどい取道いとよく。西八條ふ立ゝ。厨ゝとひゝれたて
あれば異形の神係二雑の外ふきま拍一壮あり。儘ともまの名
あて縁まぞう。ち仰きて居るゝとろふ。師消丸のえのび本まべ。
後〜のさまゝびふゝりのだゝると。一ハ。あの者を殺〜〜り
とゝ。カとカ入せば師消丸ハ。扨ゝ。ゝとろ〜き女かゝと。新まのろ〜き

拍をとるそうして演あぢりゐ「この数るくよきこのるり。吐山酒
河の生れ本石。毒あるりめを拳紀し。毒菓の秘方稚このせ
或ハ劇しくえやらうき。毒のめぐる容体さぐ。要しく論ド
きたる搖ここ巻れグ極秘るゐ我と陣対幸ふ隆こ用
あるとた必あらん。秘をべしくと老とこの「でるこまてりく。
と賞をびあぢさる鼻るやふこれ皆妻ゲ老きを厭ゐ遠
たる功るをびあるそふおりしるべ冥理ふつきんとうちをめべ一生
世くも忘るまじ。当座の謝後ふ私の業るゲら先住のめと系ら
せんとりそ人べ又うち数ひ「実めづらしく系いるけまこどもとろぐし
をあれもせらまじとこ久今るるあの猪ハ「るやどセるふ身も。

るるきうちふ先ひ人らん。と空のきうはふ押涓光ハ年ふをけふこと
ふあたけを。丹後ふ路の系わそハ。その強動大きるるまぢ。麻のめくを
ごとろのあやしくさふ心づき祢農家人ゲみれべ狭をこゲらて祢像
夫せ又抱しハ玉と展る。産抱の小猫るり。りさる番通の置紙な
らじとこおり人ども相法の妻の和ゲるとハおりしもよるしぢ追ぜしく仆祇
の刀り来て。某の辻ふ彼門の男子園一ゲ殺されて仆居しるもまこ
あやしく祢ゆハ人の系も考えぢ。とりふ泰教思業にあさいぢ。系
目の見てれられざまが書先を考んとそ立りて。曲りのふ出舎るゲら。
見總るるもるくこりふゲ。祢像を寿るのこうきびしく他見を
拝ぶぎる秘書。ようやとおりして厨子に入室。それさ人るふ後しるハ。

一巻而得
錦嚢秘巻
神像と共に
勾践

師涓

紫陽花

いろんこうるき泰夫錯数多の人の害とやうらんぴふせんくど
物をたくらん歌忌〜。源さるべたるうるねびありのきふ所へ返。
あるかろうしぬ花ろうとそみうども宸襟を悩〜あひ所へ
ふあ世泰乳ぐ。仲泰を定めさせて京ふ相国ぞのも泰内あろ
て。察内ふ安産せるめを。私ふ泰に拾出を洗ふ花りとあり。
とあ〜ざるふのうさうるたまひ。泰を流ふ綱宣ありけまと天子
泰乳の方御所とうたるひ。格別の所ふ法うて宿住を
ひまの上泰牧を渡取〜。お国丹波へ放くたうふさてれ
仲係をたづひ出さべ。国安へ中出よ。泰再無あうあむべとの。
別物を紫りて。あげきの中のうろとびと。泰乳へ参〜。天皇を

泰〜ものし。仲長の面係を紛ふかけ。親祖父より伯熟し
ふ資のお法をたち名で。脇る牧。ろき右御の旅西えあく彼ふ
笠の級ふまろるるうれもかげけ白きあるひ。泰うるあく
花の波つく牧外の愛茅ふ。ちよ代と祝へば万代の毫ひもうや
ちづきけり

神醫丹波泰乳へ。者融院の天皇の所宮。永親二年ふ
医心方をまうしとうけば。平家の一門業えうし〜頂とも。
二百年たりの時代遠るり。名医へ後もあるべたるまど。丹波
泰乳と者るるへ絶例法うあり。二編ふ記むべ〜。西次
編ふ生贅祭ふ。二位ぞのを殿付の正后ふ擬〜。孫娘と割

[illegible]湯し。[illegible]芳の肉を。醯[illegible]などの異味。[illegible]蔓の惨毒等を。ことゞく翻案せり。草安味の奏、通計十五回陸續刊行べけれども。[illegible]抜き書振れと。彼処[illegible]こゝろ。[illegible]恵を加へゝるゝと抱の好[illegible]必御覧ぜ[illegible]

巻中人物　一陽齋豊國筆

仝　景象　歌川國貞補助

浄書　谷金川

三都妖婦傳式編う

發　行　書　林

大坂

綿屋喜兵衛　出雲寺萬次郎　須原屋茂兵衛　山城屋佐兵衛　小林新兵衛　須原屋伊八郎　和泉屋市兵衛　田原屋嘉七　門屋平兵衛　山口屋藤兵衛　許子屋清七